降臨節第４主日　　ヨセフ、常識を超える信仰　　２０２２．１２．１８．

今年の降誕日１２月２５日は日曜日になります。降誕日が日曜日なので、今年はクリスマスを繰り上げることなく、降臨節第４主日の聖書日課から、学んで考える機会が与えられました。

以前おこなった説教に多少手を入れて説教を作り直しました。A年とB年とC年。降臨節第４主日の福音書を比べてみると、今年は１１月２７日からA年ですが、B年はマリアへ天使ガブリエルが受胎告知をする場面、C年は、マリアがエリサベトを訪問する場面が選ばれていて、アドベントの４番目のロウソクが、マリアのキャンドルと呼ばれるのに相応しい日曜日の日課ということになりますが、今年のA年だけは、マリアではなく、夫のヨセフに焦点が当たっている、マタイによる福音書が選ばれていることに注目したいと思います。

このお話を理解するためには、２０００年前のユダヤ人たちの習慣を知っておく必要があります。
当時は、結婚にはいくつかの手続き、形式が必要でした。まず、両家が結婚に合意する。つぎに花嫁料を花婿側から花嫁側に支払う。今日の結納のようなものでしょう。つぎに結婚関係を外部に公表します。この段階で、夫となり、妻と呼ばれるものになります。しかし、すぐ同居せず、しばらくの間、およそ1年くらい両親のもとで生活し、その後はじめて新婚生活、すなわち同居することになるのです。

ですから、それぞれ、夫、妻と呼び合う関係にあったけれど、まだ同居していない時代のできごとだった、という風に二人の間を理解しておいてください。新婚生活前に、両親のもとで、しばらく生活するのは、当時、ユダヤ社会では非常に早婚で、男は 18 歳から 20 歳、女は 12 歳から 14 歳、なんと中学１年から３年生ぐらいで結婚していました。それで、それぞれ同居生活に入る前に心構えや、生活の準備をする必要があったのでしょう。特に女性はその必要があったろうと思います。

それでは先ず、福音書の最初の方に出てくる、「夫ヨセフは正しい人であった」ということを考えましょう。マリアとヨセフは婚約中でしたが、一緒になる前に聖霊によって身ごもっていることが明らかになった、と今日の福音書の初めに書かれています。ヨセフにはこの妊娠について身に覚えのないことでした。ですから、十戒の中の９番目「あなたは偽証をしてはならない」ということに従えば、人々からマリアの妊娠について問われたなら、「私はマリアの妊娠には関わっていない」と言うことになるでしょう。そうすれば、マリアは婚約中に他の男と関係したことになります。すると、この姦淫の罪を犯したマリアは、石打の刑で殺されなければならないことになるでしょう。

もし十戒を守って、ユダヤの法律に従っていたら、マリアは殺され、ヨセフは婚約中の相手に裏切られた者ということになったでしょうが、彼自身は社会的な制裁を受けなくて済みます。でもヨセフはその方法をとりませんでした。ヨセフは法律に従う正しく生き方ではなく、別の正しい生き方を選ぼうとしていたのです。

ヨセフは「正しい人」と書かれていますが、その、正しいとは道徳的な意味ではなく、憐れみのある人という意味がギリシャ語には含まれています。自分が法律に照らして正しいか、ということではなく、マリアの隣人として、彼女のために自分はどのような道を選ぶべきか、を考えたのでしょう。

ヨセフはいろいろ悩んだでしょう。そして結論を出しました。「ひそかに縁を切ろうと決心した」のです。マリアをさらし者にして、石打ちの刑に処せられることはどうしても避けたい。それより離縁状をだして、去らせる、その場合でも、世間の人は何も知りませんから、妊娠させておいて離縁するとは、ヨセフは何と身勝手な人間かと非難は浴びるだろう。それも甘んじて受けよう。マリアを守り、自分の責任でこのことに決着をつけよう。そう決めたのでした。

そう考えるなら、ヨセフというのは、優しい人、と見ることができるかもしれません。婚約者が死刑になるのをほっておけない、という意味では、優しいのでしょう。

ところが、神様はそれ以上の道を示されました。それは、妊娠したマリアと共に生きる生活でした。

主の天使がヨセフの夢に現れました。そして、2 つの命令がありました。まず、一つは、「妻マリアを迎え入れなさい」、すなわち共に生活をしなさい、新婚生活に入りなさいです。もう一つは「マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい」です。子供の名前をつける、これは父親として、その子が自分の子であることを認める、その子の父はだれか分からない、姦淫してできたような子供ではありません、と宣言することです。ユダヤのしきたりからすれば同居前に妊娠して出来た子供、ヨセフは少しだらしないなー、と揶揄されることを覚悟しなさい、という命令です。

しかし、この夢の命令は、ただ、このかわいそうなマリアを捨てずに、妊娠した子供も一緒に自分の妻、自分の子供として受け入れなさい、ということだけではありませんでした。

そこには、私たちの常識を超えた信仰を持つように促すメッセージが秘められていました。

天使が「その子をイエスと名付けなさい。」と言った後で「この子は自分の民を罪から救うからである。」と、名前を付ける理由を語っています。イエスというのは新約聖書が書かれているギリシャ語での名前であって、実際には、「イェシュー」と言われていたと思われます。そしてそれは、旧約聖書に出てくる、モーセの後を継いだ指導者「ヨシュア」の正式な名前です。イエスはヨシュアをギリシャ語で呼んだことばです。その意味は「主なる神は私達の救い」です。

つまり、ヨセフに夢で告げた天使は、「生まれてくる男の子が、民族を救う英雄になる」と告げているのです。

そして、このマタイによる福音書を書いたマタイさんは、それを補足するように、
『1:22 このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。』と書いています。そして、その預言者とは、イザヤという、イエス様が生まれる７００年くらい前に、イスラエルの王様に仕えていた偉大な預言者のことでした。特に今日の旧約聖書で読まれた、イザヤ書７章１４節の言葉が引用されています。

『1:23 「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。』

この天使が夢で語ったお告げを聞いた、正しい人ヨセフは、その通りにした、と聖書は結んでいます。

『 1:24 ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、 1:25 男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。』

彼は、律法に従ってマリアを訴えることもせず、またひそかに縁を切ることもせず、マリアのお腹の中にいる子供を、自分の子供として受け入れて、ひとつの家族を作っていったのです。

ひとつ、誤解がないように補足しておきますと、今日の旧約に出てくる「おとめが身ごもって、男の子を産む」という場合のおとめとは、単にちいさな女の子、という意味であって、新約聖書が語っている、男を知らない処女という意味ではありません。預言者イザヤ自体は、この生まれるおさな子は、彼が最後に仕えたヒゼキヤ王という王様を指しているだろうと言われています。

ところが、時代が下って、ユダヤの国が危機に陥った時、昔現れた預言者エリヤのような洗礼者ヨハネが現れ、その後、本当の救い主が現れるのだ、と福音書を書いたマタイは、旧約聖書、特にイザヤ書を引用しながら説明しているのです。

私たちは、この、婚約者の妊娠という事態に対して、愛を持ち、また神様への信頼によって、新しい生活を始めたヨセフから、信仰について、学ぶことがあるのではないでしょうか。

人間的な見方からすると、婚約者が自分の知らないうちに妊娠し、その子を自分の子供として受け入れ、将来は自分たちの民族を救う英雄になる、と信じて、その苦労を背負うわけです。他の人から見たら愚かなことかもしれません。しかし、それは私たちがイエス様を救い主として信じる、というのとも、似ていることのように思えます。

私はお葬式や逝去者記念の式でお話する時、よくたとえに出すのですが、

私たちがイエス様を信じるというのは、イエス様が神様の所から来て、「天国は素晴らしい所だよ。」というのを、素直に信じることだ、と言います。歴史の教科書などでは、イエス様は２０００年前に生きた、単なる宗教家です。最後は十字架で殺された、あわれな人間。しかし、この方が、死ぬことを恐れている人間を安心させるために遣わされた方だと、信じられたら、私たちは幸せなこの世と、その後の生活を楽しんで迎えられる。

ヨセフは、そのような、イエス様が神様の力によってこの世に遣わされた救い主だと信じた、最初の信仰者、という風に考えるなら、私たちは、彼の決断の中に、私たちの信仰と似たものを感じられるのではないでしょうか。マタイによる福音書が「正しい人」である、と語ったヨセフが、人間の常識を超えた信仰を持ったように、私たちもそれに倣う者になりたいと思います。